

## 書 評 -

## 保全鳥類学

山岸 哲 (監) 山階鳥類研究所 (編) 393 頁  
 2007 年 3 月 京都大学学術出版会  
 3,500 円 + 税  
 ISBN-13: 978-4-87698-703-0

昨年の 12 月に鳥類を含むいくつかの分類群でレッドリストの見直しが公表された。絶滅のおそれのある種としてリストに掲載された種は 89 種から 92 種に 3 種増加しただけだったが、ランク別にみると大きな改訂が行なわれた。26 種がより絶滅の危険性が高いランクに移されたり、新たに絶滅のおそれのある種のリストに加えられ、12 種がより低いランクに移されたり、リストから外された。レッドリストが公表されてから何度かリストを見たり、見直しについての記事を目にしたしたが、種の定義のことまで考えることはなかった。

本書を開いたとき、5 部 16 章構成の最初の第部のタイトルが「鳥類保全の単位」となっていて、このタイトルの耳慣れない響きが気になった。そこで読んでみると、種というものの定義が保全と大きくかかっていることが、とても新鮮にストンと頭に入ってきた。それだけでなく、個々の種や亜種について、個体数の増減だけでなくその生態や個体群構造、遺伝的多様性などを踏まえて、絶滅の危険性を検証する必要があることなど、実例を踏まえながら説明されているので、体系的に理解し、頭を整理することができた。知っていたことも多かったが、読み進みながら考えを整理することで、目の前が開けていくようだった。

第部の最後の章は「クマタカの遺伝的多様性」というタイトルだったが、研究成果や遺伝的多様性を調べることと保全との関係だけでなく、DNA の構造や分析方法などについても詳しく書かれていた。その中に Nested Cladistic Analysis という分析方法があった。これは塩基配列の置換だけでなく、サンプルの採取地の地理的な関係も踏まえて個体群構造を調べるもので、分析の手順が説明されていたので勉強になった。DNA を用いた研究発表を鳥学会の大会でも聞くことがある。DNA や遺伝的多様性、系統などについては大学時代に一通り習ったのだが、もう忘れてしまったからなのか、僕の知らない新しい分析方法が開発されたからなのか、聞いていると方法のところが理解しきれない気持ち悪さを感じることもある。専

門書ではかえってわかりにくいのだが、クマタカの例のように具体例で説明されていると、とても理解しやすい。

このように調査方法を解説するということにも力を入れているのが、これまでの保全に関する教科書とこの本が違うところではないだろうか。DNA による遺伝的多様性の解析のほかにも、ラジオトラッキングや衛星追跡など鳥の移動を調査する方法や、鉛中毒などで知られる重金属の分析法などが各章で解説されている。さらに、絶滅の危機に直面した鳥にスポットをあてた章や、ひとつの種ではなく群集や生態系の保全についての章でも、研究を進めて行く流れや調査方法が書かれていた。

1961 年から 24 年間かけてライチョウが生息する全山を回り、なわばりの数を数えた羽田先生の調査の話などは、やはり圧巻だった。全国の生息数が数字として出てくることはほとんどない。しかも、それが人里から離れた高山での調査によるのだから、なおさら驚く。そして、このような調査が行なわれていると、同じ方法で再度調査することによって、生息数の増減を知ることができる。2000 年以降に信州大学教育学部生態研究室が行なった調査によると、多くの山では当時と生息数は変わっていなかったが、南アルプスの白根三山では半数以下にまで減少していたという。地球温暖化と言われてもなかなか実感しにくいですが、すでに逃げ場のない高山に取り残された日本のライチョウなどを思い浮かべれば、数度気温が上昇しただけで絶滅に追いやられてしまうことが簡単に想像できる。

わくわくする本というのは、なかなか出会えるものではない。「保全」と名のつく本では、特にその傾向が強い。僕の場合は、「こんな調査をして、これがわかって、次にこれを調べてみたら、あれがわかった...」という研究を進めることで得られる謎解きの面白さがあるとわくわくするのだが、この手の本ではそれがうまく伝わってこないのが一番大きな原因だと思う。そんな中で「保全鳥類学」は例外だった。もちろん、全ての章というわけではないが、多くの章で著者などが調査している姿が思い浮かび、得られた結果に納得したり、逆にこれは違うのではないかと思ったり、これは応用できるのではないかと、思いをめぐらすことができた。

これから研究しようと思っても、自分がなにをしたいのかまだ発見できずに悩んでいる学生には特にこの本を読んでみることを薦めたい。一

口に保全といってもいろいろなアプローチがあることに気づくと思う。この中から自分の興味の向くものを見つけてもらえればと思う。

高木憲太郎  
(バードリサーチ)

In the company of Crows and Ravens

Marzluff, J. M. & Angell, T. 408 頁  
2007 年 6 月, Yale University Press, \$18  
ISBN-13: 978-0300122558

いたずらっぽい眼差しをした小柄なカラスがトウモロコシの上にちょこんと乗っている。何か意味ありげな白いカバーである。

本書は動物行動学で著名な B・ハインリッチの弟子の J・マーズラフが執筆し、T・エンジェルが挿絵を担当している。マーズラフはハインリッチと共に米国メイン州の山中で過酷な冬の観察や実験を行ない、ワタリガラスの社会を明らかにした。また、マツカケスの生態と種子散布に関する研究も有名である。現在は、ワシントン大学でシアトル周辺の都市に生息するカラスの生態を研究している。T・エンジェルの挿絵は洗練されているとは言いがたいが、オーデュボンの絵を彷彿とさせるような味わいがあり、いかにもカラスらしい姿態をとらえていて、長年カラスを観察してきた人でなければ描けないと感心する。

カラスに関する本はかなりの数にのぼり、その生態と共にたいてい人類の文化に登場するカラスの事例なども取上げられている。しかし、本書でマーズラフが唱える「カラスと人類の文化的共進化」という仮説は異色である。カラス嫌いの人なら目をむきそうな話だが、文化人類学的な進化過程と共に披露される考察には説得力がある。

ワタリガラスとオオカミの密接な相互関係は有名だが、初期の人類がアフリカで進化して間もない時期から、カラスの祖先も同様に人類とつかず離れずの関係にあっただろう。その後、狩猟採集期の人類はカラスを狩猟の神と讃え、牧畜期には許容の対象、農耕期に至ると盗人の汚名を着せて、忌み嫌うようになった。カラスを追い払おうとする人間の努力がカラスの知能を発達させ、賢くなったカラスに対抗するために、人類はさらに生活上の工夫を重ねてきた。こうして人類の文化の少なくとも一部はカラスと共進化してきたという。現在でも、カラス避けグッズを開発して特許をとり、金儲けする人もいるので、マーズラフの仮説にはうなづける。

一方、人間がカラスに与える影響は計り知れないものがある。世界のカラス類の中で都市に適応したイエガラス、アメリカガラス、ハシブトガラスなどは数が増え、反対に人と共存できない種は絶滅の淵に追い込まれている。危惧されていたハワイガラスは 2002 年 9 月についに野生絶滅し、グアム島のマリアナガラスも保全努力でかろうじて命をつないでいる。人類は生息地の改変や移入種の導入によって、地域固有の種を絶滅に追い込む一方で、都市型のカラスを増加させていく。将来は、世界のカラスは種数が減って、コスモポリタンな「超カラス」だけが繁栄するようになるかもしれない。

9 章からなる本文では、今日のカラス研究があまり紹介されている。例えば、カラスの社会はマーズラフが得意とする分野であり、個体識別をしたカラスの研究はまだ少ないわが国でも、何とかその社会を垣間見たいと意欲が掻き立てられる。また、カラスに文化があるかという問いには、行動学・社会学などの定義ともつき合わせて持論を展開していて、読み応えがある。因みに、マーズラフはカラスにおける「文化」を「社会的学習によって群れのメンバーに共有される知識と伝統」と定義しており、社会的に取得した行動は基礎的な文化要素と考えている。

北米にはワタリガラス、アメリカガラス、ヒメコバシガラス、ウオガラスなどのカラス属が生息している。そのうちアメリカガラスは旧北区のハシボソガラスと 95% まで遺伝子を共有することから異論はあるものの最も近縁とされている。化石記録の証拠から、ハシボソガラスが 2~300 万年前頃にベーリング陸橋を渡って北米に入り、その後多様化したのだらうという。人類が北米に到達するのはこれより少し後なので、カラスは人類がベーリング陸橋を渡って来てあっという間に南へ広がっていくのを見ていたことになる。これに対して現在、ロシアのクリュコフらによって極東のカラス属の分類関係の研究が始まっており、その進展が期待される。

付録の資料も充実していて、カラスの観察法や研究への助言から児童書の紹介まで載っており、至れり尽くせりである。世の中に野生動物がいることを理解できない「超都会人」が増えているわが国でも、こうした統合的な視点でカラスという「野生動物」を見ていく動きが盛んになることを願う。

黒沢令子  
(北海道大学低温科学研究所)